

戦後青森県の「保守勢力」と「革新勢力」 ①

—青森県選出の国会議員像—

藤 本 一 美

<目次>

- 1 はじめに—「保守勢力」と「革新勢力」
 - 2 佐藤尚武
 - ①出生・経歴
 - ②外務省・外務大臣
 - ③参議院議員・参議院議長
 - ④「政治家」佐藤尚武の評価
 - 3 大沢久明
 - ①出生・経歴
 - ②県会議員・青森市会議員・衆議院議員
 - ③社会党から共産党へ
 - ④「政治家」大沢久明の評価
 - 4 おわりに—青森県政治の断面
- <注>
- *参考文献

1 はじめに—「保守勢力」と「革新勢力」

我が国では、戦後長い間、「米ソ冷戦体制」⁽¹⁾のはざままで、政治・社会の分野において「保守勢力 (the Conservative Forces)」と「革新勢力 (the Reform or Progressive Forces)」との対立、闘争が見られた⁽²⁾。その際、保守勢力とは、西側自由主義諸国、特に米国との関係を重視、安全保障の面では、米国に依存して自衛力を整備し、内政面では、天皇の元首化・憲

法改正など、日本の「伝統的な価値観」を追及する立場をさしており、政党でいえば、自由党、民主党が、そして1955年以降は、自由民主党（自民党）がその中軸を担ってきた、といてよい。

一方、革新勢力とは、反米・憲法擁護を唱え、旧社会主義諸国（ソ連、中国、北朝鮮）との友好を重視し、日米安保条約や再軍備には反対であり、内政面では「進歩的価値観」を擁護する立場である。政党でいえば、旧社会党、共産党などがその中軸を担ってきた、といえる⁽³⁾。

戦後青森県の政治的状況を検討する場合にも、当然のことながら、上で述べた中央政界での政治的対立の基本的枠組みである、「保守勢力」対「革新勢力」との構造が反映され、あらゆる分野で対立、自らの勢力拡大のためにしのぎを削ってきた。

一般的に青森県は「保守王国」だといわれており、農村部を中心に保守勢力が強力で、衆院議員、参院議員、および知事の多くを独占してきた⁽⁴⁾。しかし、都市部や工業地帯では、革新勢力の支持者も少なくない。実際、一時期、社会党や共産党が衆参両院議員の議席を獲得していたのは周知の事実で、革新勢力の実力を侮ることはできない⁽⁵⁾。

こうした政治的背景を前提とした上で、本稿では、戦後青森県の保守勢力および革新勢力を代表してきた「政治家」⁽⁶⁾として、本県選出の国会議員たちを取り上げて、彼らが戦後本県の政治的潮流の中でどのような足跡を残してきたのかを、各種の選挙結果を中心に分析する。

第一回目は、戦後青森県の保守勢力と革新勢力を代表する政治家、すなわち、前者の事例として佐藤尚武・参議院議員を、一方、後者の事例として大沢久明・衆議院議員を取り上げたい。もとより、佐藤尚武を保守勢力の事例として取り上げることには、異議を唱える向きもあると思われるが（特に、外務省時代の理想主義的な姿勢と参議院の「緑風会」時代を考量したなら）、しかし、戦前の日本帝国で外務大臣と駐ソ大使を経験した事実を鑑み、保守勢力の一員に組み入れた。一方、大沢久明を革新勢力の一

員に加えることには、大沢の戦前・戦後における労農運動の指導的立場からして異論がないものと思われる。

以下、本稿では、最初に佐藤尚武を対象に、佐藤の出生および外務省時代の経歴を踏まえ、参議院議員時代に焦点を合わせ、緑風会、参議院議長としての活動を検討、「政治家」佐藤尚武の評価を試みる。次いで、大沢久明を対象に、大沢の出生・労農運動での体験を踏まえ、衆議院議員時代を中心に、社会党から共産党への転身、各種の選挙への出馬を検討して、「政治家」大沢久明の評価を試みたい。

2 佐藤尚武

① 出生・経歴

〈年表〉

- ・ 1882年10月30日 旧津軽藩士・田中坤六の二男として大阪に生まれる
- ・ 1900年 3月 正則中学卒業
- ・ 1903年 3月25日 佐藤愛磨の養子となり、田中から佐藤に改姓
- ・ 1904年 7月 東京高等商業学校（一橋大学の前身）全科卒業
- ・ 1905年10月 外交官および領事官試験合格・外務省に入省
- ・ 1905年10月 東京高等商業学校専攻部領事学科・退学
- ・ 1905年11月 外交官補・メキシコ在勤
- ・ 1906年 1月26日 露国在勤
- ・ 1906年 1月27日 佐藤愛磨の三女、文子と結婚
- ・ 1914年 9月25日 ハルビン在勤（総領事代理）
- ・ 1919年12月26日 スイス国在勤（代理公使）
- ・ 1921年 4月21日 仏国在勤
- ・ 1923年 8月30日 ポーランド国特命全権公使
- ・ 1926年 1月15日 国際連盟帝国事務局長
- ・ 1930年12月 6日 ベルギー特命全権大使
- ・ 1937年 3月 3日 外務大臣（6月4日、退任）
- ・ 1940年 3月29日 イタリア国特命全権大使
- ・ 1942年 2月28日 ソ連国特命全権大使
- ・ 1946年 5月30日 日本に帰国
- ・ 1946年11月28日 枢密顧問官
- ・ 1947年 4月20日 参議院議員・当選

- ・1949年11月15日 参議院議長・就任（1953年5月退任）
- ・1953年4月28日 参議院議員・当選
- ・1959年6月3日 参議院議員・当選
- ・1971年12月18日 死去・享年89歳

出典：佐藤尚武「外交年表（附・著者履歴）」『回顧八十年』〔時事通信社，1963年〕，544～575頁。



（佐藤尚武：1882年10月30日～1971年12月18日）

佐藤尚武は、1882（明治15）年10月30日に大阪に生まれ、1971（昭和46）年12月18日、89歳の時東京で死去した。佐藤は明治、大正、および昭和という激動の世界を直接見聞、体験した人物である。佐藤は、日本の著名な外交官—政治家として世間によく知られており、戦前は、林銑十郎内閣の下で外務大臣を務めたし、第二次世界大戦末期のソ連対日参戦時の駐ソ大使でもあった。また戦後は、参議院議員として政治家に転身、「緑風会」⁽⁷⁾の立ち上げに参画、参議院議長を歴任するなど、戦後の青森県を代表する政治家の一人である。その佐藤尚武の主な経歴は、おおよそ次の通りである。

佐藤尚武は、旧弘前藩士で沖縄県警察本部長であった田中坤六の二男として出生、その後、外交官・佐藤愛磨の養子となる。旧制正則中学校（正則高等学校の前身）卒業後、1904（明治37）年、東京商業学校（一橋大学の

前身)全科を経て、同専攻部領事科へ入学している。

佐藤は1905(明治38)年、外交官および領事官試験に合格、外務省に入省する。在ロシア公使館外交官補、ハルビン領事、在スイス公使館一等書記官、在フランス大使館一等書記官、在ポーランド公使を経て、1927(昭和2)年、国際連盟の帝国事務局長を務めた。また1929(昭和4)年、ロンドン海軍軍縮会議事務総長に、1930(昭和5)年には、駐ベルギー特命全権大使に就任、このベルギー大使在任時の1931年9月、国際連盟第12回総会に出席中、「満州事変」が勃発、国際連盟第65回理事会で中国の理事からの非難に直面。第66回理事会は「第一次上海事変」のあとに開かれ、佐藤は世界からの非難を一身に受けながら日本の立場を説明する一方、日本政府に自制を訴えた。しかし日本政府は、「満州国」を承認、1933(昭和8)年の国際連盟総会でリットン調査団による報告書の採択の時には、日本代表団の一員として松岡洋右・主席代表や長岡春一・駐フランス大使とともに議場を退席。また同年、駐フランス特命全権大使を務め、1935(昭和10)年には、入省30年を迎えたのを契機に辞任を申し出て、翌1936年退任した。

佐藤尚武は1937(昭和12)年日本に帰国、林銑十郎内閣の下で外務大臣に就任する。その際、佐藤は入閣の条件として、「平和協調外交」、「平等の立場を前提とした話し合いによる中国との紛争解決」、「対ソ平和の維持」、および「対英米関係の改善」の4つを林首相らに提示、これを確認した上で外相への就任を受諾した⁽⁸⁾。

第二次世界大戦中の1942年、ソ連特命全権大使に任じられ、日ソ不可侵条約を取り結んだソ連を通じて連合国との和解斡旋を画策。1945年7月20日、東郷外相に「国体維持以外の条件は容認して戦争終結を図ることを具現した」が不採用、8月6日、ソ連から日本に対する宣戦布告文を受け取るという場面に遭遇する。

戦後1946年6月、日本に帰国した佐藤尚武は、1947(昭和22)年4月20

日、第1回参議院議員・通常選挙に青森県選挙区から出馬、当選した。以後、第3回(1953年)および第5回(1959年)通常選挙でも当選、連続3期18年間にわたり参議院議員を務めあげた。参議院議員時代には、緑風会の結成に参画・所属していたが、最後に「二院クラブ」に所属。その後、1965(昭和40)年7月の第7回・通常選挙に出馬せず、政界を引退した。この間、1948(昭和23)年、参議院外交委員長を、また1949(昭和24)年には、参議院議長など要職を歴任。1965年、参議院議員を引退後は、もっぱら「国連協会」の仕事をこなし、その会長に就任した。

その間、佐藤尚武は1956(昭和31)年12月、日本の国連加盟を承認した第11回国連総会に日本代表の1人として出席した⁽⁹⁾。著書に『回顧八十年』などがある。なお、東奥日報社はその功績を記念して、“佐藤尚武郷土大賞”を設けている。

② 外務省・外務大臣

外務省時代の佐藤尚武の行動を検討する場合に、二つの点に留意することが重要である。第一は、国際連盟から脱退時の佐藤の姿勢であり、今一つは、駐ソ特命全権大使時代における佐藤の日本政府への対応である。

1933年2月24日、日本は国際連盟から脱退した。それは基本的に、佐藤個人に責任を帰せることはできないとはいえ、不明朗な点が拭えない。外交官として、世界から孤立して何の得があるかということに尽きる。例え、軍部の暴走で連盟からの脱退を余儀なくされたとはいえ、世界情勢を一番知る得る立場にある外交官としての“責任”は免れない。この点に関して、佐藤は、『回想』の中で、次のように苦渋しながら述べている。

「私個人としては、日本の将来のためを計るに、日本はかなりの無理をしのんでも、この際、連盟との正面衝突を避け、連盟に踏みとどまることを考えねばならぬ。連盟を脱退して世界で孤立するということは日本の利益ではないと確信しておったのである」と指摘。その上で「内外の情勢は

停止するところを知らず、ついに（満州国の）承認も敢行してしまったので、私からいわせれば、もはや連盟との妥協の余地は全然なくなったと、見通しをつけざるをえなかったのである」と認識。最後に「これらの問題については、後世の史家のみが適切な判断を下しうるのであろうか」と、自らの直接的判断を避けている。実際、佐藤がいうように、「日本は国際協調という国の大方針を根こそぎ捨ててしまった。すなわち、この瞬間から日本は世界の仲間はずれとなり、弧影悄然たる孤児になったのである」⁽¹⁰⁾。世界の孤児になった日本政府、そして軍部が、果して列強を相手にまともな外交を遂行できると考えていたのであろうか、との疑問を禁じえない。

一方、駐ソ連大使時代の行動にしても、同様のことがいえよう。確かに、駐ソ特命全権大使として佐藤は、ソ連の仲介で終戦をはかろうとする日本政府の方針に対して仮借なき意見を具現、批判した⁽¹¹⁾。しかし、1945年8月6日、ソ連の対日宣戦通達により、佐藤大使の尽力は徒労に終わる。後知恵であるが、外務省や軍部との板挟みにあっていた当時、佐藤の苦渋は理解できるにしても、全権特命大使である佐藤の対応は日本外交のトップとして、情報収集の不足や判断の誤謬からして外交官としていかなものか、と考えざるを得ない⁽¹²⁾。

ところで時代は前後するが、佐藤尚武は1937（昭和12）年日本に帰国、3月3日、林銑十郎内閣の下で外務大臣に就任している。既述のように、佐藤は入閣の条件として、平和協調外交、平等の立場を前提とした話し合いによる中国との紛争解決、対ソ平和の維持、対英米関係の改善の4つを林首相らに提示、これを確認した上で就任を受諾した。だが、就任直後の議会答弁において、佐藤外相は持論である中国との話し合いを展開、戦争勃発の危機は日本の考え次第であると述べて、物議を醸した。そのため、軍部や右翼から、「軟弱外交」だと強い非難を浴びることになる⁽¹³⁾。

しかし、そうした状況下にあっても、佐藤外相は、関東軍が推し進めた

華北分離工作に反対、中国との対立を避けるため、具体策として日華貿易協会会長・児玉謙次を団長とする経済使節団を中国に派遣。使節団の一行は、3月12日に神戸港を出帆して中国に渡り、蒋介石と会見、中国政府要人および経済人と26日まで何度か会合、協議した。だが、6月、佐藤外相は林内閣の総辞職とともに退任、その直後に「盧溝橋事件」が生じた⁽¹⁴⁾。佐藤の尽力は泡と消えてしまった。佐藤が外務大臣に就任していた時期は、わずかに3ヵ月間に過ぎず、リーダーシップを発揮できないまま退陣を余儀なくされたので、外務大臣—「政治家」としての佐藤の正しい評価はできない。ただ、世間評によれば、林首相と同じく、議会答弁で物議を醸しただけで、職を辞した、としかいいようがない。だから、林内閣の崩壊を早めた張本人の一人であった、と考えられなくもない⁽¹⁵⁾。

③ 参議院議員・参議院議長時代

1946年6月、日本に帰国した佐藤尚武は翌1947（昭和22）年3月19日、枢密顧問官を辞任、戦後第1回の参議院議員・通常選挙に出馬する。その理由について、佐藤は次のように述べている。「元の貴族院はお断りしたが、新たにできる参議院に一つの議席を占めるということは、将来の国政の上の発言権を持つことであり、私もできることならば一席を持ちたいものだと考えるようになっていた」⁽¹⁶⁾。

佐藤は1946年11月に、郷里青森県の新聞である東奥日報社に呼ばれて国民講座と題する講演会を行っている。それは、佐藤のいわば「ソ連時代の報告会」となり、極めて評判がよく、多くの県民と親しく話をかわす機会を得ることができた。また、選挙運動では郷土の先輩で、元新聞記者の衆議院議員＝工藤鉄男（日東）が手助けしてくれ、佐藤が政治家に転出する際に大きな力となった。

東奥日報紙は、第一面で「けふ 佐藤尚武氏講演会」の見出しを掲げ、主催は青森県、東奥日報社で、後援は国際連合研究会青森支部となってい

る。また第二面では、「“7年ぶりです” 佐藤元外相 来県講演会」という記事を掲載するなど、佐藤の講演会の意図と日程が詳しく紹介されている。具体的には、19日午後1時、青森市で、20日、弘前市、21日、五所川原、そして22日、黒石での講演会日程を報道、それは当時として“一大遊説講演会”（デモンストレーション）であった、ことが理解できる⁽¹⁷⁾。

佐藤自身は、青森県という「郷土で生まれもせず、育ちもしなかった私が、郷土の人たちから同じ郷土の出身者としてあたたかく扱ってもらったことにたいし無常の満ちを感じ、同時に強い親近感に打たれ」と吐露している⁽¹⁸⁾。選挙結果は、最高得点での当選であった。

1947年4月20日に行われた参議院議員・通常選挙では、4人が立候補、無所属から出馬した佐藤尚武は、13万5,403票という得票を獲得（6年任期）、第一位で当選。また民主党公認の平野善次郎が、7万2,301票を獲得（3年任期）、二位で当選した。次点は、自由党公認の唐牛敏世で4万8,434票、社会党公認の秋田徳三（筆名雨雀）は3万2,778票に留まった。なお、投票率は全体で58.27%であり（内訳は男性69.0%、女性48.61%）、知事選に比べるとかなり低かった⁽¹⁹⁾。

佐藤尚武の初当選について、東奥日報紙は、次のようにコメントしている。「全県下からひろく得点をあつめた佐藤氏にたいしては確かにインテリ層の支持、しかも絶対棄権のない確実な投票はあったにせよ同氏のもつ元外相、前枢密顧問官の肩書がモノをいったことも事実で同氏の将来に期待した選挙民の政治意識は一応了とするも、その反面事大主義思想、官尊民卑の風が未だやまぬ事も認めぬわけにゆかぬ」⁽²⁰⁾。ちなみに、参議院は戦前、「貴族院」だったということもあって、その性格づけが不徹底であり、そのため棄権率が41.73%に終わるという汚点を残した。

晴れて参議院議員に当選した佐藤尚武は、作家の山本有三が発案した「緑風会」の立ち上げに参画、外務委員会に所属した。2年後、外務省の先輩であった松平恒雄議長が急死、その後釜として1949年11月15日、参議

院議長に就任し、これを1953年まで4年間務めた。

翌1950年9月28日、津島文治・県知事が辞任、後任の知事をめぐり、青森県内の各党は活発な動きを示した。自由党はあくまで津島の再出馬を促してやまず、10月9日、党議をもって決定、津島も再出馬を承諾した。一方民主党は、すったもんだのあげく、10月15日、佐藤尚武・参議院議長の提案で、参院議長公邸で開催された在京の県政界長老たち、すなわち、佐藤尚武、工藤鉄男、苫米地義三、笹森順造、および夏堀源三郎の自由党と民主党のいわゆる「五長老会談」の場で、知事は超党的であるべしとの声明を発表、自由党の津島候補を応援することを決定した⁽²¹⁾。この時、その橋渡しをしたのが、佐藤に他ならず、参院議長としての地位と権威を活用したわけである。

越えて1953年4月24日、参議院・通常選挙が行われ、地方区では緑風会の佐藤尚武（29万4,422票）が、また全国区では改進黨・苫米地義三が42位で各々当選した。今回の参議院・通常選挙は、衆議院の突然の解散もあって、公示日が衆議院と同じ3月24日と重なった。そのため、参院選挙に対する県民の関心は総じて低く、投票率は平均61.1%（内訳は男性68.99%、女性54.82%）であった。県内の有権者たちは参院選には全く関心がないかのようで、衆院選の時のような興奮は街で見られなかった⁽²²⁾。

選挙の結果は、現職で緑風会の佐藤が、無所属の大久保弥三郎（5万9,657票）および共産党の大沢久明（2万9,631票）に圧倒的大差をつけて再選された。佐藤は現に参議院議長という要職にあり、選挙戦では圧倒的に強いことが予想された。事実、結果は佐藤の独走に終わった。

それから4年後の1957年7月21日から9月10日にかけて、津軽地方の五所川原市において、県内初の「平和産業大博覧会」が開幕。国連加盟と市制施行3周年を記念する青森県平和産業大博覧会－「五所川原博」が7月21日、盛大な開会式を皮切りに会期52日間をもって華やかに開催した。この時、外交界の長老である佐藤は、平和産業大博覧会の総裁として開催の

挨拶をしている⁽²³⁾。

越えて1959年6月2日、参議院・通常選挙が行われた。地方区では、現職で緑風会の佐藤が元外務大臣、参議院議長などの経歴にものをいわせ、14万1,647票を獲得、自民党の森田重次郎（13万7,977票）に3,669票の僅差で、三選された。社会党の森田三喜雄（8万5,863票）、および共産党の中村勝己（1万0,921票）は、佐藤と森田による保守の争いの間に埋没した。投票率は50.47%に留まり、全国平均の58.75%を8.28ポイントも下回る結果に終わった。相次ぐ選挙で、有権者の間では“選挙疲れ”が生じたのだらう⁽²⁴⁾。

事前の予想通り、地方区で緑風会の佐藤尚武は自民党の森田重次郎を振り切って、三度目の当選の栄誉を手にした。ただ、今回の選挙では一時、佐藤は苦戦であると報じられた。しかし、佐藤は既に参議院議員を二期12年も務めており、県下全域に名の通っていたのが圧倒的強みで、終盤に入り、佐藤は優勢なうちに選挙戦を進めることができた。本来の地盤である津軽地方をはじめ第一区の郡部では森田候補の猛攻撃を受けたものの、父親の出身地弘前市や選挙戦の天王山といわれた青森市で大量得点をあげて勝利を手にした⁽²⁵⁾。

東奥日報紙は、「戦いのあと 顧みて」と題して、佐藤の三選を次のように報道している。「76歳の老政治家—佐藤尚武氏は、三たび県民の信任を受けた。今度の地方区は従来独走してきた佐藤氏に対して自民森田、社会盛田、共産中村の三氏が公党の面目をかけて激突、低調といわれながらも今までの参議院選に見られない興味がかけられていた。事実、フタをあけて見て投票率が意外に悪かったため中村氏を除く三候補はシーソーゲームをくりかえしていたが、やはり名の通った佐藤氏が当選した」と指摘。

その上で、「佐藤氏の勝因は何といっても本県が生んだ著名な“外交政治家”という経歴が強く県民の中に染み込んでおったことで、“本県のシンボル佐藤”という、いわば“教組的”な支持層が広くあることをまざま

ざと表した。かなりの老齢にもかかわらず、年齢はさして大きなハンデキキャップとはならなかったし、立ち合いないし街頭演説でも外交界の長老らしく国際政治を踏まえて政策を力説したことも大きく影響したようだ、と結んだ⁽²⁶⁾。

1965年、緑風会から二院クラブに所属していた佐藤尚武は82歳という高齢もあって政界を引退することを決意、この年の参議院・通常選挙には、出馬しなかった。結局、佐藤は参議院議員を三期、18年間務めあげ、その間に参院議長に就任するなど、戦後本県政治に大きな足跡を残した。政界から引退後の6年、1971年12月18日に死去、享年89歳であった⁽²⁷⁾。

東奥日報紙は、佐藤尚武の死亡について、次のような竹内俊吉・知事の弔問を掲載している。「戦後、郷里の本県から参院選に立候補、当選したが、政界では練達の士として評価され、参院議長として、また緑風会の生みの親として大きな功績を残された。本県人としてめったに輩出することのない郷党の大先輩を失い、本当に惜しい」⁽²⁸⁾。

④ 「政治家」佐藤尚武の評価

政治家としての佐藤尚武を評価するにあたり、戦前の外務大臣時代の議会答弁と戦後の参議院議長の野党対応という二つのエピソードを取り上げて、検討してみたい。

既述のように、佐藤が外務大臣に就任したのは、1937（昭和12）年3月3日のことで、林銑十郎首相から要請されたのである。その時、佐藤は林首相に平和外交入閣四条件を申し出て、林首相の同意と、杉山陸相の同感を得て有田の後釜として外相に就任した経緯がある。

しかし、佐藤外務大臣は、6月3日、わずかに3ヵ月で、退任を余儀なくされる。それは佐藤外相の議会答弁が問題となったからに他ならない。佐藤は3月12日、「(外交上の)危機を招くも招かざるも皆日本自体の意図によって決せられる旨を強調し」、暗に軍部や右翼の方針を批判したので

ある。結局、その後林内閣は総辞職、佐藤外相は、大きな政治的成果を残すことなく、退陣を余儀なくされたのである。佐藤尚武に言わせれば、現在の危機的状況は日本の動向次第というわけである。しかし、当時の日本の置かれていた“政治的状況”を考えるならば、そうした発言が軍部や右翼政治家を刺激し、どのような反発を招くかは十分理解していたはずである。佐藤は「古武士の風格を持つ外交官」と評された。佐藤の主張は間違いないとはいえ、やや「理想主義的」であって、それがすべてを台無しにした、ともいえなくもない⁽²⁹⁾。

戦後、佐藤尚武は、生まれたところでもなく、ろくに住んだこともなかった青森県地方区から参議院議員・総選挙に出馬・当選している。参議院議長時代に佐藤は、外交官時代とは別な意味で厳しい政治の世界の現実に直面する。ただ、佐藤は議長時代には、大きな懸案事項を解決するなど、果敢に決断・実行する“政治家”として成長した姿(?)を見せている。すなわち、1952(昭和27)年7月4日、参議院本会議で破壊活動防止法の採決に際し、職権で衛視を動員、野党議員を演壇と議長席から排除させたのである。

この点について、佐藤は次のように述回している。「私は国会というところは立法の府であり、議員は互いに節度を守って、静かなふんいきのうちに十分論議を重ね、法案の審議を行うべき場所と心得ていた。極左分子に率いられた民衆の宣伝活動と化すがごときは、厳に禁止しなければならぬ」⁽³⁰⁾。

もう一つは、同じく議長時代に、佐藤は選挙で議員の半数が改選されるたびごとに参議院議長が辞表を提出することを、自ら実践して、これを慣例化したことである⁽³¹⁾。

我が国は、1956年12月18日、80番の国として国連への加盟が認められた。佐藤尚武も、重光葵・外務大臣とともに政府代表として、晴れて国連総会に招聘されて出席した。この時の感想を、佐藤は自伝『回顧八十年』の中

で次のように述べている。それを見ると、佐藤が戦前日本外交の失敗を深く反省していたことを、知ることができる。

「私は、議席についたトタンに23年前、すなわち昭和6年のあの満州事変のため、昭和8年ついにジュネーブの国際連盟から脱退して総会の席を去ったときのことを思い出さずにはいられなかった。当時の悲惨な光景が眼底にちらつくのであった。それにひきかえ、23年後の今日、八十カ国の国々と席を同じうし、額を上げて会議に臨むことができたのであり、なんとというすばらしさであろうかと、自問自答せざるを得なかった」⁽³²⁾。

以上、結論的にいえば、佐藤尚武は確かに、外交官としては一部で失敗した面も見られた。しかし政治家としては概ね成功したと、いえるのではないのか。その場合、若き時代の外交官として稀なる貴重な体験が、晩年に至り「政治家」としての決断、行動をするときに、血となり肉となり、それが佐藤尚武にとって大いに役立ったのは疑いない。人間として“段階的発展”をとげたのである。実際、佐藤自身も、回顧録の最後で、外交官時代に言及して「私の過去は失敗の歴史であった」と述べている⁽³³⁾。

佐藤尚武の外交官および政治家時代に、通底しているのは、その根に「理念的体質」があり、現実と間で齟齬をきたし、孤立を深めていったことである。政治家の時代も「緑風会」の理念にこだわり、参院の政党化の潮流からはずされてしまう。結局、緑風会は、最後には自然消滅、佐藤自身も政界を引退した。また外交官時代も、国際連盟からの脱退、ソ連の対日宣戦の通告でも明らかのように、“理念”を表に出すあまり、現実への対処が遅れ、孤立への道を辿り、袋小路に入っていった。

政治家としての佐藤について、東奥日報紙の記者・松岡孝一は、次のように述べていて興味深い。いわく、「良識の府と言われ参議院の選挙だけに、佐藤の公約は天下、国家のことばかり。道路や橋建設など地元のものは一つもない。当選談話も「緑風会のような不偏不党の組織が望ましい。これからの仕事は、まず日本を救うこと」、と次元が高かった⁽³⁴⁾。

なお、佐藤尚武は外交官と政治家との関係について、次のような見解を披露、それは傾聴に値すると思われるので、最後に紹介しておく。

外国で長い年月を暮らした大使「その人が、任国ではかなりの信用を得、交際社会でも知られ、りっぱに日本を代表することのできた人であったとしても、いったん国内に帰れば、その人の手腕は一向買われまいということになる。ことに政党政治とか軍閥政治とかそういう時代になると、内地に地盤をもっているといえないのでは、大きな違いができることになる。たとえ、その人が優秀な外交官であったとしても、国内的には政治家としての地位が与えられないのである」⁽³⁵⁾。

3 大沢久明

① 出生・経歴

〈年表〉

- ・ 1901年12月15日 青森市に生まれる
- ・ 1917年 3月 青森市立商業学校（現在の県立青森商業高校の前身）卒業
- ・ 1919年 市ヶ谷監獄用度課事務員、2年後同人雑誌発刊で解雇
- ・ 1922年11月 弘前市で北部無産社・結成
- ・ 1924年 9月 青森合同労働組合・創設
- ・ 1927年 4月 労農党県支部連合会・結成
- ・ 1929年 1月 共産党・入党
- ・ 1929年 4月16日 「4・16事件」で検挙・懲役5年
- ・ 1934年 9月 出獄
- ・ 1939年 9月 県会議員・当選
- ・ 1940年 6月 青森市会議員・当選
- ・ 1941年 1月 第三次治安維持法違反容疑で検挙、議員辞任
- ・ 1945年12月 青森県労働協議会議長・就任
- ・ 1946年 4月10日 衆議院議員選挙、社会党から出馬、第5位で当選
(3万5,085票)
- ・ 1947年 4月 5日 県知事選挙に出馬、落選(6万2,884票)
- ・ 1947年 4月25日 衆議院議員選挙、社会党から第二区に出馬、次点で落選
(1万6,827票)
- ・ 1948年12月 5日 日本共産党へ再入党
- ・ 1949年 1月23日 衆議院議員総選挙 共産党から第二区に出馬、落選

- ・ 1953年 4月24日 参院議員・通常選挙（地方区），出馬・次点で落選
(2万2,977票，次点2位)
- ・ 1955年 2月27日 衆議院議員総選挙，共産党から第二区に出馬，次点第4位で落選（8,005票）
(2万9,631票)
- ・ 1956年 7月20日 県知事選に出馬，落選（3万9,302票）
- ・ 1958年 5月22日 衆議院議員総選挙，共産党から第二区に出馬，落選
(5,683票)
- ・ 1960年 1月12日 弘前市長選，共産党から出馬，次点で落選（6,960票）
- ・ 1960年11月 2日 衆議院議員総選挙，共産党から出馬，最下位で落選
(3,839票)
- ・ 1961年 2月 共産党第11回県党会議 県委員長に就任（～1970年）
- ・ 1963年11月21日 衆議院議員総選挙，共産党から第一区に出馬，次点第2位で落選（1万1,391票）
- ・ 1967年 1月29日 衆議院議員総選挙，共産党から第一区に出馬，最下位で落選
(1万1,400票)
- ・ 1985年 3月11日 死去，享年83歳

出典：「大沢久明—その人と時代刊行会『年譜』『大沢久明—その人と時代』〔北方新社，1987年〕，276～286頁。



(大沢久明：1901年12月15日～1985年 3月11日)

大沢久明（本名，喜代一）は，1901（明治34）年12月15日に青森市に生まれ，1985（昭和60）年 3月11日に，青森市で亡くなっている。享年83歳であった。出生地は青森市の農家で，青森商業学校を卒業した。大沢は大正・昭和初期の青森県を代表する著名な労農運動家であり，戦後は社会党

から衆院議員選挙に出馬して、当選した。後に日本共産党に鞍替えし、各種の選挙に出馬したもののすべて落選、長らく青森県の党委員長を務めた。戦前・戦後の激動期における青森県で、「大沢（久明）の活動の軌跡は、そのまま本県の社会運動の歴史」であった⁽³⁶⁾。

その大沢久明の主な経歴は、およそ次の通りである。大沢は1919（大正8）年、上京して市ヶ谷監獄用度課雇となるが、しかし1921（大正10）年、同人雑誌の発行を理由に解雇される。この頃から社会主義運動に入り、北部無産社（弘前市）、青森合同労組を結成した。その後、多くの労働運動に参画、何度か警察に拘留される。1927（昭和2）年、労働農民党青森県連を結成、1929（昭和4）年には日本共産党に入党。「4.16事件」で検挙され懲役5年に処せられた。出獄後も何度か検挙された。だが、1939（昭和14）年には青森県議に当選、また1940（昭和15）年には青森市議にも当選している。しかし、1941（昭和16）年に官憲に検挙され、議員を辞任した。戦後はただちに日本社会党に参加、1946（昭和21）年、社会党公認で出馬、見事に衆議院議員に当選した。1948（昭和23）年には、日本共産党に再入党、その後、各種の選挙に出馬したものの、既述のようにすべて落選している。結局、大沢は1961～1970（昭和36～45）年まで、およそ、9年間、同党青森県委員長として活躍した⁽³⁷⁾。

大沢はまた、労働運動や政治活動の傍ら文人としても健筆をふるい、多くの著作を公刊しており、主著に『大沢久明著作集』（全6巻）などがある。

話を戦前に戻して、大沢の活動を敷衍しておく。1921年に帰郷した大沢は「青森無産社」を組織、翌年1922年夏、治安警察法、新聞紙法違反で検挙されている。この事件を契機に弘前のアナキスト野呂衛との交流が始まった。11月、本県初の無産政治結社「北部無産社」を弘前市で結成。その年の暮れ、野呂が弘前の第52連隊に入営、北部無産社の同人たちは、赤旗と黒旗を掲げてデモし、営門を突破して大沢が激励の演説をぶった。そ

れは県内で初めての“反戦デモ”だった⁽³⁸⁾。

上で述べたように、北部無産社は、大沢が中心となって創設した本県最初の社会主義結社であって、それは多くの活動家に影響を与えたといわれ、現在の青森県の「革新運動」の源となった。1924年、安部磯雄、大山郁夫らが無産政党樹立を目指して政治研究会を設立、それと同時に全国初の同会県連に改組、その後、労働農民党青森支部（1926年）、共産党組織（1929年）の結成へと進んだ。大沢は1925年には、政治研究会青森支部を母体とした本県初の労組組織、青森合同組合をつくって本県労農運動を指揮するなど、その活動は、大正後期—昭和初期の本県社会運動の中核であった、といえる⁽³⁹⁾。

ただ、北部無産社の方は2年ほどで解散した。そこで大沢は青森市に舞い戻り、青函連絡船の貨車航送で失業した沖仲士たちを組織、また1925年10月には、「青森合同労組」を結成したが、それは県内で初の労組であった。その後、大沢は、メーデーを主催、車力や木造などで小作争議の支援に走り回った⁽⁴⁰⁾。

労農運動における大沢の活動に関しては、これまで多くの図書・雑誌が発刊されており、枚挙に暇がないので、そちらに譲りたい⁽⁴¹⁾。そこで次節では、「政治家」としての大沢に焦点を合わせて、その活動を中心に紹介する。

② 県会議員・青森市議員・衆議院議員

大沢久明は、1939年9月、青森市から県会議員に当選、また翌1940年、青森市議会議員にも当選している。当時は、県会議員と市議員を兼任することが認められていたのだ。大沢は1941年1月、第三回治安維持法違反容疑で検挙されるまで、2年という短期間であったとはいえ、戦前に既に県会議員を務めている。

実は1936年秋に、大沢は合法的な政治活動に転じ、産業組合法に基づく

「青森購買組合」を組織するなど、米など主要生活物資の安定的供給を通じて、青森市民への浸透を図っていた。これが大沢をして、県議会および青森市議会議員当選への呼び水となったのは疑いない。

1939年9月の県議選では、大沢は青森市区から立候補、見事に当選した。定数は4名で、後に県知事となる山崎岩男（2,269票）がトップ当選、二位は和田喜太郎（2,193票）、そして大沢は第三位に食い込み、1,763票を獲得、晴れて県会議員の席を手にいれた、第4位は後の青森市長の横山實で1,653票を獲得して当選している。

東奥日報紙は、今回の県議選の結果について、青森市は全く番狂わせであったと指摘、「青森市だけは従来 of 選挙形態から著しい変化を来していることが注目され」たのだ、と分析している。一方、大沢に関しては「新県議の異彩大沢氏 市民の声を最後まで信頼した気持ちが遂に反映してこの栄冠」、という見出しを付して大沢当選の背景を報道している⁽⁴²⁾。

ただ、問題が生じた。県議会で「(最高位で当選した)山崎岩男は住所不定だから当選無効」であると資格問題が持ち上がり、参事会で論議されたのである。県議10人で構成する参事会では、山崎が所属する政友会中島派は劣勢だった。だがこの時、大沢が山崎支持に回り、5対5となり、当時の鈴木登・知事は「山崎は失格に当たらず」と裁定、山崎の当選が確定した⁽⁴³⁾。

この時、大沢は「県民が選んだ代表だから、住所なんか問題でない」、と大塚英五郎（後に共産党県議）に語った。「大沢さんは青森商業出身。山崎が青商の先生をしていたことで親近感を抱いていたのかもしれない」、と大塚は推測をめぐらす⁽⁴⁴⁾。ただ、大沢の県議としての活躍もわずかな期間にすぎなかった。大沢は、1941年1月、(第三次)治安維持法違反容疑で検挙され、議員を辞任したのである。

戦後、1946年4月10日、第22回衆議院議員・総選挙が行われ、社会党公認の大沢久明は3万5,085票を獲得、津島文治、苫米地義三を押さえて、

第5位で当選を果たした。時に大沢は44歳で国会の赤じゅうたんを踏むことになる。大沢は大選挙区制限連記制という制度の利を得ての当選であり、青森全区から革新票をむらなく集めることができたのが奏功したのだ⁽⁴⁵⁾。

総選挙で当選した大沢代議士は、国会の場において憲法問題などで、共産党と共同歩調を取り、そのため、社会党代議士会で発言禁止処分を受けている。だから、「国会関係のニュースには必ず大沢の名前があった」、という⁽⁴⁶⁾。

その後大沢久明は、衆院議員の座を捨てて、社会党から1947年4月5日の知事選挙に出馬、また、同25日の衆議院総選挙にも出馬した。周知のように、知事選では大敗を喫した一方、総選挙でもわずか91票差で社会革新党の外崎千代吉に惜敗する。その後大沢は、共産党に再入党、1967年1月まで衆院選8回のうち実に7回、参院選、知事選、市長選にそれぞれ1回出馬している⁽⁴⁷⁾。ただ、何度も指摘したように、残念ながら、大沢はそのすべてに落選の憂き目をみている。このように、多くの選挙に出馬した理由は、大沢は共産党県委員長として、何よりも共産党支持者の動向＝勢力を確認したかった、からであろう。

③ 社会党から共産党へ

政治家としての大沢を検討する場合、大沢は当初、社会党に入党し、同党から、衆議院議員選に出馬、当選、しかしやがて共産党に再入党、政党を変えて多くの選挙に立候補したことである。社会党を捨てて何故、共産党の県委員長の要職を堅持したのかが、問題となる。

共産党の面々は、大沢が社会党に所属していたこと自体が、過ちであったと認識している。その代表格は、二葉宏夫・弁護士の見解である。二葉は次のように大沢の行動を批判する。「本来共産主義者でありまた共産主義者でなければならない彼が、戦後の混乱期、不覚にも日本社会党を選択

したことに究極の基因があったのではなかろうか。そうであれば、大沢久明にとって、戦後日本社会党での3年間はまさに針の筵、苦悶の時代であったはずである」と指摘⁽⁴⁸⁾。

その上で、二葉は「結論として、大沢久明が社会党に入党し三年間もそこで籍を置いたのは、……彼が本県戦前の無産運動の中心的指導者であったからではなかろうか」と分析している⁽⁴⁹⁾。

それでは、社会党員であった大沢が何故、共産党に再入党することになるのか？ 大沢は自らの著作の中で、その背景と理由を次のように述べている。「私は昭和21年3月10日、戦後最初の総選挙で当選した。公然たる共社統一主義が県民の支持を得たのであった。いちばん印象に残っているのは、新憲法であった。社会党ははじめから“天皇制護持論”が圧倒的で創立準備会では“天皇陛下万歳”を三唱した。その点で当時の自由党などとなんの違いもなかった。わたし達少数派は当然のことながら“主権在民”“将来は天皇制を破棄し、民主共和国”を目標とすべきだと主張したが、反共派は、主権は国民にもなく天皇にもなく、国家にあるなどと、根本的に自由党と同じ弁であった⁽⁵⁰⁾。だから、大沢は共産党の憲法案に賛成し、社会党から発言禁止の懲罰を受けたのである。要するに、大沢が社会党から共産党に「転向」したのは、社会党の天皇観というものが、戦前日本と何ら変らない、と考えたからに他ならない。

そこで前出の二葉は、次のように大沢の行動を総括する。「大沢久明、彼は、その天与の資質で県内の戦前激動期における労農運動、無産社運動の自他ともに認められる中心的指導者になった。しかし、それなるが故に、戦後本県の社会党結成に連携し、また本県共産党再健後は更に進路の変更が困難になったのではなかろうか。社会党入党こそ、天性の指導者大沢久明にとってまさに千慮の一矢であった⁽⁵¹⁾。

ただ私自身は、人間のいわゆる“段階的発展論”の視点から、戦後の大沢の行動を肯定したい。いうのも、大沢は本県農民運動の草分けで、西郡

車力村の「小作争議」などで活動、その後、本県最初の労働組合組織である「青森合同労組」を創立、労働農民党県連の結成など、激しい弾圧の中で幅広い無産者運動を展開してきた。そして、戦後は社会党県連委員長、県労組協議会議長を経て、社会党から衆議院議員に当選するなど、その後社共統一戦線をリード、やがて共産党に再入党した⁽⁵²⁾。その際、留意すべきは、戦前・戦後の日本、ことに青森県が置かれた社会状況を考えるならば、大沢の「政治家」として足跡には首肯できる点が多々ある、と考える。過ちのない人間などは、この世に存在しないし、また物事はすべて一挙に進むこともできない、各々段階が必要である良き事例を示している。

④ 「政治家」大沢久明の評価

1947年4月、初代民選知事の選出された津島文治は、次のように叫んだ。「馬喰（ばくろう）と赤まむしに勝ったじゃ」と。馬喰は自由党の小笠原八十美のことで、赤まむしとは社会党の大沢久明を指している。津島は北津軽郡の大地主の出身であった。一方、大沢の方は戦前からの労農運動の活動家であって、小作争議の支援に駆けまわり、粘り強く地主に食い下がっていた。大地主の家に生まれ育った津島にとって、大沢はまさに「赤いまむし」的存在である、と映ったのであろう⁽⁵³⁾。

前年1946年4月、衆議院総選挙の時には、大沢は社会党公認で出馬、3万5,058票を獲得し、進歩党の津島（3万2,768票）に2,290票をつけて第5位に食い込んでいる。だが、翌年1947年4月の知事選挙では、民主党の津島が17万7,818票、自由党の小笠原は15万3,126票を獲得、津島が第一回民選知事の座を射止めた。この時、大沢は社会党公認で出馬し、第三位に終わったとはいえ、何と6万2,884票も獲得している⁽⁵⁴⁾。大沢は、前回の選挙の時の得票を約二倍も増やしているのだ。それは、当時の新しい社会党、ことに社共統一に対する県民の期待感が表れていたのだ、といえるのではないのか。

しかし、同年4月の衆議院総選挙では、大沢は社会党公認として第二区から出馬、1万6,827票を獲得したもののわずか91票の僅差で、次点に甘んじた。そして、1949年の衆議院総選挙では、今度は共産党公認で第二区に出馬したが、2万0,977票獲得、次点第二で落選している。さらに1952年10月の衆議院総選挙でも、大沢は同じく、共産党公認に第二区から出馬したが、8,249票に終わり、以後、大沢の得票は大きく伸びることはなく、落選を繰り返し、二度と当選は適わず“泡沫候補”に陥った。

ただ、大沢が共産党県委員長として、連続して選挙に出馬し続けたことは、やがて、1969年12月の衆院総選挙で共産党・津川武一の当選に繋がってくる、ともいえよう。しかしそれは、必ずしも共産党の政策が支持されたからではなくて、津川の“人間的魅力”が有権者を駆り立て、当選を可能にしたことに、注意することが肝要である⁽⁵⁵⁾。

大沢の政治家として役割は、社会党議員として初当選した時、社会党所属議員であったにもかかわらず、天皇制の廃止を謳った共産党の憲法草案に賛成した国会行動に凝縮されている。政治家＝大沢の原点がそこに見てとれよう⁽⁵⁶⁾。大沢の進歩的な見解は、今もって正しい。共産党県委員長時代の大沢は、自身の立場よりもむしろ党の意向と立場を最優先して、政治活動を展開したもの、と思われる。

既述のように、大沢久明は1985年3月11日、83歳で永眠した。東奥日報紙は、大沢について次のような弔問記事を掲載した。「本県労農運動の中心的存在で、文筆活動でも知られる大沢久明（本名喜代一）氏が11日午後零時56分、急性肺炎のため青森市の協和病院で死去。83歳」⁽⁵⁷⁾。

4 おわりに—青森県政治の断面

本論でも再三述べたように、佐藤尚武は戦前、外交官として外務大臣やソ連大使を務めあげ、戦後は参議院議員に転身、緑風会を立ち上げ、最後

は参議院議長に就任するなど、青森県だけでなく、全国的な「政治家」として活動した。佐藤は青森県人大臣第1号として林内閣の外相を経験、吉田茂や幣原喜重郎と並ぶ我が国外交の大立物であり、その後、参議院議長として名をはせた⁽⁵⁸⁾。

一方、大沢久明も、戦前、労農運動の旗手として活動、多くの投獄に遭いながら、戦後、社会党員、後に共産党に転身、長らく青森県共産党委員長を務めた。衆議院議員・総選挙をはじめ各種の選挙に共産党候補として出馬、同党の勢力拡大のために尽力した意味で、本県を代表する「政治家」の一人であった。大沢はまた“文人”としてもよく知られ、多くの著作を残している⁽⁵⁹⁾。

両者に共通しているのは、佐藤尚武の場合、戦前、日本帝国主義時代外交官として活動、戦後、参議院議員に出馬・当選した一方、大沢久明の場合も、戦前、労農運動家の経験を生かし、戦後、衆議院議員に出馬・当選した点である。つまり、両者はともに戦前の貴重な厳しい体験を十分生かした形で、戦後「政治家」になったという意味で、ほぼ同じような道歩んでいるし、また、両者はイデオロギー的立場こそ180度異なるものの、先例に問われない“進歩的”な見解を有し、その点で軸を同じくしている、いってよい。

なお、佐藤尚武と大沢久明は、権力の座をめぐり選挙で一度だけ直接対決している。それは、1953年4月24日、参院選の時である。この時、緑風会公認の佐藤は29万4,423票という大量得票で当選、これに対して大沢は、共産党公認で2万9,631票の獲得にとどまり、敗退したものの、当時の本県「革新勢力」の代表として意地を見せた⁽⁶⁰⁾。

青森県の戦後の政治状況を考える場合、佐藤は「保守勢力」の一翼として、大沢は「革新勢力」の一翼として、基本的な立ち位置は正反対を指向した。つまり佐藤は、“資本主義的自由主義体制”を、一方、大沢の場合、“社会主義的自由主義体制”を目指した。しかし、ともに各々分野で大き

な足跡をしるした人物である。ともあれ、佐藤尚武と大沢久明の経歴と政治家としての活動を比較・考察することを通じて、戦後本県の置かれた保守と革新の政治的断面の一部が明らかになれば幸いである。

《注》

- (1) 「米ソ冷戦体制」とは、第二次世界大戦以降、世界を二分した米国を盟主とする資本主義・自由主義陣営と、ソ連を盟主とする共産主義・社会主義陣営との対立構造をいう。
- (2) 革新という用語の原語は、一般的には、“Reform”であるが、“Progressive”を指す場合もある。保守とは、「旧来の風習・伝統を重んじ、それを保存しようすること」であり、革新とは、「組織・慣習・方法などを変えて新しくする」ことである（新村出編『広辞苑』〔岩波書店、1955年〕。政治学者の岡沢憲美によれば、保守政党は、「現存する体制の価値を強調する政党、もしくは伝統的な社会的価値を強調する政党」である。だから、革新政党は、「現行システムの基本的枠組み・基本的価値に挑戦し、改革を主張する政党」である。「保守」対「革新」という文脈で語る場合、社会主義的な価値を代表する政党という意味で革新政党という表現が、また資本主義的な価値を代表する意味で保守政党という表現が使用されることが多い。保守政党の多くは、大衆組織政党というよりも幹部政党、名望家政党という組織的体質を持っている。なお、革新政党は、政治・経済システムへ社会主義的要素の導入を主張する政治勢力を指して使用されることが少なくない（『政治学事典』〔弘文社、2000年〕、171、1018頁）。
- (3) 藤本一美『戦後政治の決算—1970年～1996年』〔専修大学出版局、2003年〕、391頁。
- (4) 木村良一・馬渡剛「保守王国・青森県の政治」『青森中央学院大学研究紀要』17号、2011年、参照。
- (5) 藤本一美『戦後青森県政治史：1945年～2015年』〔志學社、2016年〕、参照。
- (6) 政治家とは、選挙によって選出され、議会に議席を有する者を指すが一般的である（大六野耕作「政治家」『現代政治学事典』〔ブレーン出版、1991年〕、527頁）。
- (7) 緑風会は、参議院の院内会派で、1947年5月20日、第1回参議院本会議が召集された時には、92人を擁し最大勢力を誇った。新憲法を打ち出し、左右の両極を排し、中道主義への立脚を目指した。緑風会は基本的に保守政党に協力したが、参議院のみの会派で、衆議院に候補者を擁立することも、政権獲得を目標とすることもしなかった。そのため後に、参議院の政党化が進むにつれて緑風会の勢力は衰えていった。1965年の第7回、参院通常選挙には候補者を擁立せず、6月2日、自然消滅の形で解散した（野島貞一郎編著『緑風会十八年史』〔緑風会

- 史編纂委員会, 1971年], 参照)。
- (8) 佐藤尚武『回顧八十年』[時事通信社, 1963年], 358~359頁。
- (9) 同上, 535頁。
- (10) 同上, 281~286頁。
- (11) 同上, 492~497頁。
- (12) 長谷川毅『暗闘—スターリン, トルーマンと日本降伏』[中央公論社, 2006年], 198, 203~206頁。長谷川は, 「実際にはモロトフ(ソ連外相)は日ソ中立条約の破棄を通告してから4ヵ月の間, 佐藤大使と日本政府を騙し続けてきた」と指摘している(同上, 332頁)。
- (13) 栗原他編『佐藤尚武の面目』[原書房, 1981年], 11頁~13頁。
- (14) 同上, 14頁, 林首相は前月に組閣していたが, 外相ポストは空席のままだった。そこで外務省のベテラン佐藤に白羽の矢を立てた。しかし, 海外生活が長く国内, 特に軍部に人脈を持たない外交官は外相に不向き—というのが佐藤の持論だった(『佐藤尚武』『青森20世紀の群像』[東奥日報社, 2000年], 18頁)。
- (15) 佐藤自身は, 「首相の投げ出しの真の理由がどのへんにあったか, ほとんどだれにも, 理解できなかった」と吐露している(佐藤, 前掲書『回想八十年』, 370頁)。
- (16) 同上, 520頁。
- (17) 『東奥日報』1946年11月19日。
- (18) 佐藤, 前掲書『回想八十年』, 523~524頁。
- (19) 藤本一美『現代青森県の政治(上)1945~1969年』[志學社, 2015年], 33頁, 『東奥日報』1947年4月21日。なお, 佐藤は当選が確定した4月21日午後, 直ちに, 「これから大鰐町の工藤鉄男候補の応援演説にでかけるのだ」と弘前駅へ向かった(『東奥日報』1947年4月22日)。
- (20) 『東奥日報』1947年4月21日, 貴族院は, 大日本帝国憲法下の日本における帝国議会の上院であり, 1890年11月29日から1947年5月2日まで存在, 衆議院とは同格の関係にあったが, 予算先議権は衆議院が有し, 非公選の皇族議員・華族議員・勅任議員で構成, 議会の解散はなく, 議員の多くが終身任期, 上流社会の代表および官僚勢力の牙城として衆議院や政党勢力を抑制するため設けられた(『現代政治学事典』[ブレーン出版社, 1991年], 172頁)。
- (21) 『東奥日報』1950年10月16日。
- (22) 木村良一『青森県参議院議員選挙』[北方新社, 1998年], 18頁, 『東奥日報』1953年4月25日。
- (23) 藤本, 前掲書『現代青森県の政治(上)1945~1969年』, 122頁, 『陸奥新報』1957年7月22日。
- (24) 藤本, 前掲書『現代青森県の政治(上)1945~1969年』, 136頁, 『東奥日報』1959年6月3日, 木村, 前掲書『青森県参議院議員選挙』, 29頁。

- (25) 『東奥日報』1959年6月3日。
- (26) 同上。佐藤本人は「このときは、不幸にして自民党の候補と保守同士が得票を争う結果に陥り、少数の差をもってかろうじて私が当選するという始末になってしまった」と、述べている（佐藤、前掲書『回顧八十年』、532頁）。
- (27) 『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、309～310頁。
- (28) 『東奥日報』1971年12月19日。
- (29) 『朝日新聞』1937年3月13日、栗原、前掲書『佐藤尚武の面目』、11～15頁。
- (30) 佐藤、前掲書『回想八十年』、531頁。
- (31) 山本有三「佐藤さんと緑風会」『国際時評』1970年11月号、11頁。
- (32) 佐藤、前掲書『回想八十年』、535頁。
- (33) 同上、543頁。
- (34) 松岡孝一『一地方記者の記録—東奥日報とともに半世紀』〔東奥日報社、2000年〕、200頁）。だから、次のような批判も生じる。「青森県選出の前議員の佐藤尚武にしても……確かに人格、識見ともに青森県、いなわが国の代表的政治家であることにおいて異論はない。しかし率直に言って、県民との密着の点において、残念ながら欠けるものがあつたことを指摘せざるを得ない。……青森県から政府など中央への陳情や切望に対しては、積極的に便宜を図ってもらいたい。“先生”として県民の上に座り込むことなく、県民から、県民のために選び出されたものの自覚を、謙虚に堅持してほしいのである」（『陸奥新報』1965年7月5日）。
- (35) 佐藤、前掲書『回想八十年』、348～349頁。同じことは、政治学者の場合にもいえよう。立派な業績を上げた著名な政治学者が政治の世界に飛び込んだところで、周りの状況を良く知らず立ち位置もないから、正確な判断を下すことはできず、失敗することが少なくない。
- (36) 大沢久明その人と時代刊行会編、二葉宏夫「天性の革命家—大沢久明—」『大沢久明：その人と時代』〔北方新社、1987年〕、12頁。
- (37) 前掲書『青森県人物事典』、93～94頁。
- (38) 例えば、『青森県労働運動史』〔青森県労政課、1974年〕、大沢久明『青森県労働運動史』〔大沢久明60年記念後援会、1962年〕、『改定増補 物語 青森県共産党史—大沢久明著作集3』〔北方新社、1975年〕などを参照。
- (39) 『風雪の人脈—第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版部、1983年〕、110頁、前掲書『改定増補 物語 青森県共産党史—大沢久明著作集3』、132～134頁。
- (40) 『青森に生きる—一竹内俊吉・淡谷悠蔵対談集』〔毎日新聞社、1981年〕、148～149頁、なお、本書は戦前の青森県における労農運動の実態について詳しい証言集であり、イデオロギー的立場に問われない客観的資料として貴重である。無産社に関しては、前掲書『改定増補 物語 青森県共産党史—大沢久明著作集3』、20～22頁を参照。
- (41) 前掲書『風雪の人脈—第一部・政界編』、110頁。

- (42) 当時の新聞は、大沢の議員当選の声を次のように伝えている。「僕が立候補した当時は大沢は供託金組だといったのは、既成政党だった。但し僕達は孤立無援ではあったが、最初から最後まで市民を絶対信頼して起こったのだ。この僕達の気持ちで遂に市民の僕達に対する信頼となり、同時に既成政党に対する弔鐘となってもらったのだと信じる」(『東奥日報』1939年9月27日)。
- (43) 前掲書『風雲の人脈 第一部・政界編』, 112頁。
- (44) 同上。
- (45) 木村良一『検証 戦後青森県衆議院議員選挙』[北方新社, 1989年], 21頁。
- (46) 前掲書, 『風雲の人脈 第一部・政界編』, 113頁。
- (47) 同上, 114頁。
- (48) 前掲書, 二葉宏夫「天性の革命家—大沢久明—」『大沢久明—その人と時代』, 27頁。
- (49) 同上, 28頁。
- (50) 前掲書『物語 青森県共産党史—大沢久明著作集3』, 221~222頁。
- (51) 前掲書, 二葉「天性の革命家—大沢久明—」『大沢久明—その人と時代』, 30頁。
- (52) 前掲書『青森に生きる 竹内俊吉・淡谷悠蔵対談集』[毎日新聞社, 1981年], 83~90頁。
- (53) 前掲書『風雲の人脈 第一部・政界編』, 109頁。
- (54) 『東奥日報』1947年4月7日, 藤本, 全掲書『現代青森県の政治(上)1945~1969年』[志學社, 2015年], 26頁。
- (55) 木村良一・馬渡剛「保守大国・青森県の政治」『青森中央学院大学 研究紀要』第17号, 参照。
- (56) GHQの一員が、社会党の発言禁止を間違っているとしたのは、大沢の勇気ある進歩的な行動を評価したからだ(前掲書『物語 青森県共産党史』, 222頁)。国会の開会式では天皇の御言葉がある。しかし、共産党は従来欠席していたのを改めて、近年、出席に転じている。天皇制を擁護するような態度は遺憾である。大沢の伝統を無視してはならない。
- (57) 『東奥日報』1985年3月12日(夕)。
- (58) 松岡, 前掲書『一地方記者の記録』, 198頁。
- (59) 竹内俊吉, 淡谷悠蔵, および大沢久明の三人は、イデオロギーの相違を超えて仲が良く、共通しているのは、「最初に文学に目覚め、その文学を通じて、自己の完成を目指した点にある」(前掲書『青森21世紀の群像』, 206頁)。
- (60) 参院選挙戦の大沢の展望は次の通りである。「大沢氏もまた反保守派の全力集中で期待し同氏が度々の選挙で得た成績、とくに全県一区の第一回民主衆院選に当選した実績を基礎に労組に働きかけをしている。ことに衆院選でかつての同社社左淡谷悠蔵氏の当選に気をよくし、青年層へも活発に呼びかけを行っている」(『東奥日報』1953年4月23日)。政治学者の木村良一も、この時の大沢の選挙運動

を次のように、分析している。「大物大沢は、戦後初の衆議院選に社会党から立候補、全県一区ということもあって当選していたが、代議士を辞めて知事選に立候補して落選、そして今回は、共産党に移籍しての立候補となった。全県一区の参議院では、大沢の人気からしてかなり善戦するのではないかと期待されたが、まったく振るわず党の基礎票を拾ったに過ぎなかった（木村、前掲書『青森県参議院議員選挙』、17～18頁）。

《参考文献》

- ・『青森20世紀の群像』〔東奥日報社、2000年〕
- ・『青森県労働運動史』〔青森県労政課、1974年〕
- ・『青森に生きる―竹内俊吉・淡谷悠蔵対談集』〔毎日新聞社、1981年〕
- ・木村良一『検証 戦後青森県衆議院議員選挙』〔北方新社、1989年〕
- ・木村良一『青森県参議院議員選挙』〔北方新社、1998年〕
- ・木村良一・馬渡剛「保守王国・青森県の政治」『青森中央学院大学研究紀要』17号、2011年
- ・佐藤尚武『回顧八十年』〔時事通信社、1963年〕
- ・栗原他編『佐藤尚武の面目』〔原書房、1981年〕
- ・野島貞一郎編著『緑風会十八年史』〔緑風会史編纂委員会、1971年〕
- ・山本有三「佐藤さんと緑風会」『国際時評』1970年11月号
- ・長谷川毅『暗闘―スターリン、トルーマンと日本幸福』〔中央公論社、2006年〕
- ・『大沢久明：その人と時代』〔北方新社、1987年〕
- ・大沢久明『青森県労農運動史』〔大沢久明60年記念後援会、1962年〕、
- ・『改定増補 物語 青森県共産党史―大沢久明著作集3』〔北方新社、1975年〕
- ・藤本一美『戦後政治の決算―1970年～1996年』〔専修大学出版局、2003年〕
- ・藤本一美『現代青森県の政治(上)1945～1969年』〔志學社、2015年〕
- ・藤本一美『戦後青森県政治史：1945年～2015年』〔志學社、2016年〕
- ・『風雪の人脈―第一部・政界編』〔青森県コロニー協会出版部、1983年〕
- ・松岡孝一『一地方記者の記録―東奥日報とともに半世紀』〔東奥日報社、2000年〕
- ・『現代政治学事典』〔ブレーン出版、1991年〕
- ・『政治学事典』〔弘文社、2000年〕
- ・『広辞苑』〔岩波書店、1955年〕
- ・『東奥年鑑』
- ・『東奥日報』
- ・『陸奥新報』
- ・『デーリー東北』